

# 「日本のミッションスクールの女子教育の原点を探る —エックハルトの教育観を手懸りに—」

## Search in the starting point of female education of a Japanese a missionary school. —In comparison with Eckhart's educational philosophy—

中 川 憲 次  
Kenji Nakagawa

### はじめに

ここでは「日本のミッションスクールの女子教育の原点を探る」にあたって、福岡女学院を例として取り上げたい。

福岡女学院の創設者は1885（明治18）年の5月に来福した米国メソジスト監督教会派遣のジェニー・ギール女史である。ギール女史は福岡女学院に来られる前には、長崎の活水女学院におられた方である。そして、後述するように、『福岡女学院百年史』には、ギール女史の右腕として福岡女学院開学の際に大きな功績を残した大島サキのことが紹介されている。

ちなみに、二瓶浄幸氏の「大島サキと活水における最初のリバイバル」と題された論文によると、元武士であった夫は酒飲みで裕福でなかったことや、何らかの理由によって夫と離別し、自活の必要が生じたため、活水に職を求めたらしいと記されている。さらに、ギール女史が初めて大島サキと会った際に、彼女の全財産はみすばらしい一、二着の着物のみで、寝具さえも持っていなかったとも記されている。後述の『福岡女学院百年史』の記事には「元武士の妻であったが、保母の手伝いとして活水女学校に雇用され」とあるが、二瓶氏によると、機織りの指導や、幼い生徒の指導者として雇われたというのが真相のようである。その折に活水女学校側は三十代の女性をという条件を付けていたそうであるから、大島サキは少なくとも三十歳を越えていたと思われる。活水女学校での職務の傍ら、

彼女は聖書研究会に熱心に参加して、主にギール女史の薫陶を受けたという。そして2年後の1883年5月に活水女学校で最初のリバイバル、すなわち信仰復興が起こった際に、大島サキは真っ先に信仰を告白し、その後、最初のリバイバルをきっかけに創設された、後に活水女学校の神学科となる婦人伝道者養成組において本格的に聖書を学んだという。こうして、活水女学校の神学科の第一期卒業生5人の内の1人となった大島サキが、恩師ギール女史と共に、福岡女学院の創設の際に、大いに貢献したのである。

ところで、福岡女学院は、当時どうみても弱い立場にあった女性たちに、何とかして教育の機会を与えようとして建てられた学校であった。それは、当時、同じように誕生したミッションスクールに共通する理念だったのではないと思われる。そして、今回の発表では、このことを、「大島サキ神学生の誕生」のきっかけとなった、「1883年5月」の「活水女学校で最初のリバイバル」との関係で、また、全国版の1883年リバイバルに共通する「そのリバイバルが一般信徒や婦女子」を中心に展開されたという事実との関係で考察したい。

ついでながら、私は、三十代半ばで夫と別れ、ほとんど無一物になっていた大島サキが、創設後間もない活水女学校に雇われた事実を、奇跡のように思う。そして、そうして誕生した「神学生大島サキ」が、福岡女学院の創設に大きな役割を果たしたということに、今回、特に着目した。

## 1 草創期の福岡女学院について

『福岡女学院105年史』に「英和女学校の誕生 ― 約20日間の呉服町時代―」と題して次のような記述がある。「1884（明治17）年11月2日、福岡に美以美教会が創立されると谷川雅素牧師はすぐに長崎に赴き、メソジスト監督教会婦人伝道外国伝道会に対して女学校の設立を強く要望した。これに対して入学志願者が50人以上あればとの回答があり、谷川は帰福してただちに生徒募集を始めたところ、54人もの応募者があった。谷川は、長崎を再び訪ねこれを宣教師に報告し、実地視察を請うた。（略）ギール宣教師は活水女学校神学生の大島瑳瑒を伴い、4月22日来福、1週間滞在して実地調査を終え、いっそう学校創立の決意を固めた。」（1）

ここで注目したいのは、谷川牧師が「女学校の設立を強く要望した」のに対して、メソジスト監督教会婦人伝道外国伝道会側が「入学志願者が50人以上あればとの回答」を行った点である。ここには、学校経営における採算の観点がうかがわれる。採算を度外視して、ただただ日本における女子の自立に寄与しようという意思是、それほど強烈ではなかったようである。もしくは、「50人」以下であって、伝道の成果とはみなしがないという、数的成果主義があったのであろうか。

今や18歳人口減少の傾向も極まり、福岡女学院も御多分に漏れず、入学者定員割れの恐怖にさらされている。福岡女学院の存在意義を社会が認めなくなりつつあるのである。福岡女学院の設立を念願した谷川牧師の動機は、女子教育を通してキリスト教を伝道することであつたろう。しかし、今や福岡女学院を存続せしめようという動機は、ほとんど事業的動機であるように見受けられる。谷川牧師は「入学志願者が50人以上あれば」とのメソジスト監督教会婦人伝道外国伝道会の回答に対して「54人もの応募者」を集めて女学院設立にこぎつけたのであつた。

現在の福岡女学院も採算が取れなくなればその教育事業をやめねばならないであろう。ただ、次のような証言もある。「創立当初、約五十名の生徒募集に対して、実際集まったのは約二十名乃至三十名であり、その年齢も区々にして修業年限として定まれるものなく、当時生徒獲得の一手段として給費をなしたが、キ

リスト教主義なるため応募する者少く、且つその異同多く、江口はる（渋谷）氏の如き、その組僅かに一人になった事もあるといふ」（2）。このことは、当時の写真を見ても明らかであるが、このように実際には生徒は50名も集まらなかったのである。にもかかわらず教育活動がはじめられ、その後も何とか続けられたのは、偏に、谷川牧師やギール女史、そして大島サキ等、それに続いた人々のキリスト教伝道に対する情熱であつたろう。

ここにおいて、明治の信仰復興、いわゆるリバイバルの意義深さが浮かび上がってくる。谷川牧師の要請で活水女学校から福岡に赴いたギール女史に同行してきた大島サキは、創設期の活水女学校で、いわゆる明治18年のリバイバルを経験している。「大島サキと活水における最初のリバイバル」（3）と題された論文で二瓶氏が記しておられるところによると、大島さきは機織りの指導や、幼い生徒の指導者として活水女学校に雇われたというのが真相のようである。その折に活水女学校側は三十代の女性をという条件を付けていたそうであるから、大島サキは少なくとも三十歳を越えていたと思われる。活水女学校での職務の傍ら、彼女は聖書研究会に熱心に参加して、主にギール女史の薫陶を受けたという。そして2年後の1883年5月に活水女学校で最初のリバイバル、すなわち信仰復興が起こった際に、大島サキは真っ先に信仰を告白し、その後、件のリバイバルをきっかけに創設された、後に活水女学校の神学科となる婦人伝道者養成組において本格的に聖書を学んだという。こうして、活水女学校の神学科の第一期卒業生5人の内の1人となった大島サキが、恩師ギール女史と共に、福岡女学院の創設の際に、大いに貢献したのである。

因みに、大島サキが活水女学校で経験したリバイバルが含まれるところの「明治18年のリバイバル」について、二瓶氏は上掲の「大島サキと活水における最初のリバイバル」の中で、「バラから洗礼を受けて高崎教会や両国教会の牧師を歴任した星野光多」の証言を星野光多著『信仰の復興』から次のように引用しておられる。「凡て此度の感動は牧師教士のごときものゝ、位置より非ずして反って小さき一書生かよわき少女に始まりて一般の信徒に及ぼしたり、今も尚人に悔改をあたへ人を救いに導くものは會中の信者にして、會を

理め牧する人にあらず堂々たる紳士の家に到りて勸誨をなす者は信者の尊重たる人にあらずして、下き處の信徒或は婦人なり、尊重たる信者牧師教士は其熱心に動かされ、其勞働に倣ひて次第に進み出るの有様なり。余今この實際に遇て馬太傳十一章廿五節同廿一章十六節コリント前書一章廿七廿八節などの眞意を知れり云々」と報告している。実際のリバイバルには、弱く小さき者、つまり教会の周辺及び底辺から次第に教会全体に及ぶという特徴がみられた。」(4)

このように、「明治18年のリバイバル」は、「下き處の信徒或は婦人」達から起こったリバイバルだったのである。このリバイバルのトーンが、福岡女学院も含まれるところの当時の女子のミッションスクール誕生に大きく影響したのではなかったか。福岡女学院の創設期において重要な役割を果たした大島サキは、まさにそのような女性の一人だったのである。星野氏が記している如く、「下き處の信徒或は婦人」の一人であったのである。私は、このような当時のリバイバルの特徴が、福岡女学院の創設に大いに原因していると思うのである。

そして、ここでベギン達の誕生が思い出されるのである。ベギン達は正に当時のヨーロッパにおける「下き處の信徒或は婦人」と言うべき存在であった。この存在を教育すべき対象としてマイスター・エックハルトが意識していたことは明らかである。その著『神の慰めの書』の第3章においてエックハルト曰く、

「異教の師であるセネカは言っている。『ひとは宏遠で卓越した事柄については、宏遠で卓越した心と、崇高な魂で以って論ずるべきである』と。また『このような教えを無学な人人に向って話したり書いたりすべきではない』という人もいることであろう。それに対して私は次のように言おう。もし学の無い人たちを教えるべきではないというのであれば、その場合には何びとたりとも教えを受けるということができなくなり、且つまた何びとたりとも教えたり書いたりすることができなくなるのだ、と。なぜかという、学の無い人たちが学無き人であることから学の有る人になるために、ひとは学の無い人人を教えるのであるから。」(5)

この「学の無い人人」こそは、エックハルトにとってベギン達であったのである。エックハルトはベギン

達が「学の有る人になる」ことを願っていたのにちがいない。

また、エックハルトはパリ大学でリベラルアーツから専門課程に至る課程の教育を受けていたはずである。それを修了したからこそ、その後二回もパリ大学の教授職を務めているのである。そのエックハルトが、パリ大学で学ぶことのできなかったベギン達の中に有意義なる知を看取していたということは特筆すべきであろう。

## 2 福岡女学院草創期の教育内容

草創期の福岡女学院の教育内容を知るには、1985年7月に出された広告を見るのがよいであろう。曰く、「基督徒英和女子教校ハ是迄福岡呉服町八番地ニ於テ英学邦学算術ヲ教授シ来リシ処本月六日(月曜日)ヲ以テ福岡因幡丁下モ西角(三十一番地)ニ移シ内国裁縫外国裁縫編法織法縫箔法音楽書学内外料理法等ノ教授ヲモ始ム」(6)

これは、呉服町における20日間の教育活動の後、因幡町の校舎で「基督徒英和女子教校」として新しく出発するに際しての広告である。よって、最初の呉服町での教育内容は「英学邦学算術」だけだったのである。そのうち、「英学邦学」は正に中世ヨーロッパの大学における自由学芸七科(artes liberales)の内の三学、すなわち文法、修辞学、論理学にあたるであろう。また「算術」は四科、すなわち「音楽、代数、幾何、天文学」の内「代数」に当たるであろう。要するに、福岡女学院はその草創期において、いわゆるリベラルアーツ教育を旨としていたのである。しかし、その二十日後には「内国裁縫外国裁縫編法織法縫箔法音楽書学内外料理法等ノ教授」が加えられているのである。この内「音楽」「書学」などはなおもリベラルアーツに属するであろうが、その他は全て実科である。このような科目を加えた時から、福岡女学院はいわゆる「良妻賢母型」の学校となってしまう可能性もあったと言えよう。そして、事実、過去を振り返る時、福岡女学院が「良妻賢母」を育成した学校として社会に認められてきたのも否めない事実である。

私はここで、中世ヨーロッパの大学におけるリベラルアーツの概念を比較の為に持ち出したが、これには

無理もある。なぜなら、中世ヨーロッパの大学ではこの「三学四科」を終了した後で、神学や法学、そして医学という専門課程に進んだのである。現在の日本では「三学四科」の学びは高校までで終了している。その意味で草創期の福岡女学院というミッションスクールは、現在の高校までの教育をしていたのであり、それに職業教育が付け足されていたのである。ただ、それは、単なる実科の付加された高等学校ではなかった。私は商業高校の出身であるが、1970年ごろの商業高校では、「三学四科」の時間を減らして、その分を実科教育にあてていた。たとえば、普通科の高等学校では、数学や英語は「数学B」とか「英語B」とか呼んで、深い内容を教えていた。それに比べて、商業高校では数学A」とか「英語A」とか呼んで、浅い内容を教えていたのである。その点、草創期の福岡女学院の教育は違っていた。そのことを示す証言がある。『福岡女学院五十年史』に曰く、

「総じて創業期の学校は、これを今日発達せる女子教育機関に比すればその諸般の設備は勿論及ぶべくもなく、生徒にしても前述の如く年齢も極めて不揃いであり、その数も年毎に増減甚だしく、一口にいえば寺子屋式の趣の多分にある学校組織であったが、之を内容的に見る時はその教材は極めて程度高く、一般生徒の学習態度の真摯さは今日吾人の想像外のものであり、加うるに学校全体、教師も生徒も渾然一体となって真に温かい家族的な親しみの中にあった。」(7)。

この証言によっても、草創期の福岡女学院の教育は、「三学四科」の教育において、その「教材は極めて程度高」きものであり、充実していたことがわかるのである。そして女学院の体制がより一層整ってくると、その「教育内容は、英学、邦学、内外裁縫、編法、織法、縫箔法（金箔や銀箔を縫いつけたもの、近世では縫いは刺繍、衣服の模様を金糸・銀糸で縫う）その他音楽、画学、内外料理法、また、その他の時間は、聖書の講義や奨励の伝道に多くの時間は取られていたようだ。特にギールは米国でも秀でた音楽師にして、傍ら諸科の卒業を得たる才女で、賛美歌の練習も行われた」(8)。

それより何より重要なのは、ギール女子が熱心に聖書を教えていた事実である。『福岡女学院五十年史』は「(生徒たちが) 夜間も又聖書の原典についてその

講義を聞いた」(9)と記している。ここにギール女史の伝道意欲がいかに強烈なものがあったかが示されている。また同時に、バイブルウーマンとしての大島サキの働きも窺える。そして、この聖書の教育にこそ、言わずもがな、ミッションスクールとしての福岡女学院の教育の神髄があったのである。このためにこそ、福岡女学院は創設されたのである。聖書の教育に対する情熱が失われた時、福岡女学院の教育事業は、そこで働く教職員の失業対策事業になってしまうのである。

### 3 大島サキの存在の意味

現在の福岡女学院のホームページには「開校に際して谷川、大島の尽力は大きなものでした」とある。私は、特に大島サキの貢献の大きさについて思うのである。しかし、私には、大島サキが単純に良妻賢母を育てる学校として福岡女学院の創設に関わったとは思えないのである。なぜなら、まず彼女は良妻賢母たりえなかった女性である。彼女は武士であった夫と何らかの理由でわかれているからである。それは二瓶氏の論文中の次の文章で明らかである。「大島は自身の出自や活水に関わる以前の生活について固く口を閉ざしていたので、7年間在籍した活水にも、28年間仕えた熊本教会にも、文章記録はもとより関係者の伝承としてもほとんど記録が残されていない。かろうじて、III. The Bible Woman's Training Department, in KWASSUI JOGAKKO-1879~1929-, 42と、LETTER FROM MISS GHEER, in Heathen Woman's Friend, 43に、わずかな手がかりを見出すのみである。それらによれば、大島が活水に関わるようになったのは、活水創設から2年目の1881年、生徒の機織の指導と若い生徒たちの世話をしてくれる人材を求めたことによる。その折、士族出身で30代の大島が推薦されてきた。」(10)

またサキが機織りの技術を身に付けていたことについても二瓶氏は今しがたの文章に続けて記しておられる。こうである、

「当時、長崎では武家の女性が機織の技術をもっていたという例はみあたらない。ただ、長崎と縁が深い佐賀(鍋島)藩には機織の伝統が現存する。ひとつは佐賀錦(あるいは鹿島錦)である(略)士族出身の大

島がその技術をもっていたとしても不自然ではない。しかも佐賀錦には卓上の織機で済むため、生徒の教育用には適していた。しかし、これを裏付ける資料はない。」(11)

「裏付ける資料はない」としても、活水女学校がサキを雇う際の理由にサキの機織りの技術がなっていたのであるから、サキが機織りの技術を身に着けていたことは確かである。その技術が、福岡女学院の草創期においても生かされたのである。すなわち、その技術が身を援けて、彼女は正にキャリアウーマンとして生きる道を得たのである。そのキャリアウーマンとしての大島サキの福岡女学院を去って後の人生については、『福岡女学院百年史』と件の二瓶氏の論文の「結びにかえて」の部分とに適切に記されているので、それを引用させていただきたい。まず、『福岡女学院百年史』に曰く、

「一八八一年（明14）年、元武士の妻であったが、保母の手伝いとして活水女学校に雇用され、まもなく神学科生徒となり、生徒の中より最初に信仰に入り、バイブルウーマン（婦人宣教師）として、ギールの誠実な友であり、有能な助手となり、婦人の諸活動では、ギールの右腕として信頼されていた。活水女学校神学科の第一回神学生となり、英和女学校創設にあたっては、協力者として、日本メソジスト福岡教会では婦人伝道師として働いた。（一八八四―一八八七）。その後日本メソジスト熊本教会に着任、婦人伝道師として、教会の母と慕われて、二十八年の長期間にわたり活動、一九一七年（大6）年十一月二十八日永眠した。」(12)

次に二瓶氏の論文に曰く、

「本稿では横浜に端を発する1883年リバイバルについて概観し、活水最初のリバイバルがその流れの中で生じたことを確認しつつ、その発端を開いた大島に注目した。活水における最初のリバイバルの果実として創設された神学科は1923年に閉じられたが、その精神は『祈りと奉仕』を土台とする活水のエートスとして、今も脈々と教育活動に息づいている。大島を含む活水最初の卒業生となった神学科の5名は、いずれもその結晶である。とりわけ大島サキは、その人格的感化及び影響の大きさに際立っている。神学科在学時から福岡女学院の創設に関わり、女学院と関係が深い福岡美

以美教会では婦人伝道師の任務を負った。また、卒業後赴任した熊本教会では28年間婦人伝道師として仕えて『教会の母』と呼ばれ、教会外では紫苑会を拠点とする慈善活動に指導的に関わった。」(13)

大島サキは、福岡女学院で学ぶ者たちに自分のように生きてもらいたかったのではないだろうか。

ところで、大島に結婚歴があったことは確かである。現在確認されている大島が写った最古の写真は、神学科の学生としてギール女史と創設にかかわった福岡英和女学校（現福岡女学院）創設直後、おそらく1885年頃のものである。髪型は既婚女性を示す丸髷、しかも引眉であることから出産経験の可能性も否定できない。

#### 4 大島サキとベギン達の比較

大島サキは、12世紀から14世紀にかけて中世ヨーロッパに登場した半聖半俗の疑似修道女の群れであったベギン達によく似ている。ベギン達は貴族の家の出でないために正規の女子修道院に入れなかったために、ベギン館と呼ばれた家に10人から20人で共同生活を行っていた。彼女たちの様子はマイスター・エックハルトのドイツ語説教86番から窺える。その説教の最後から二つ目の段落でエックハルト曰く、

「マリアが主の足元に座って主の言葉を聞いていた時は、まだ彼女が学んでいた時であった。ようやく学校に入って、彼女が生きることを学びだした時だったからである。のちに彼女が学びおわり、キリストが昇天し、彼女が聖霊を受けた時、はじめて彼女は奉仕の生活を開始し、海の彼方にまでも旅をし、説教をし、教え、使徒たちに仕える女、洗濯する女となったのである」(14)

ここには女性が説教ができるような教育内容が前提されている。また、教師となることが出来るような教育内容も前提されている。しかし、それだけではない。人に仕える仕事をすることや、洗濯することも、その教育内容として前提されている。このようなエックハルトの教育観をうかがわせる言葉が、同じ説教86番の今しがた引用した箇所のすぐ前にある。エックハルト曰く、

「ある人たちは仕事から解放されるようになりたいと

思っているが、そのようなことはありえないと私は言いたい。(15)」

さらにもう少し前の箇所には次のように言われている。エックハルト曰く、

「マルタはきわめて本質的であったので、(心を配りつつ)用事をする働きも彼女を妨げることはなかった。むしろ仕事も用事も彼女を永遠なる浄福へと導いたのである。(16)」

ここには、手仕事をはじめとする労働を重視するエックハルトの教育観がうかがえる。

さて、当時のヨーロッパにおいて「奉仕の生活を開始し、海の彼方にまでも旅をし、説教をし、教え」た女性たちとは、ベギン達に他ならない。ベギン達はケルンの修道院院長でありケルン神学大学の学頭であったエックハルトの説教を、いわば「聴講生」として聴いたのである。それが、彼女たちの学びであった。そして、エックハルトの説教の特徴は、かつてキリスト教史学会で私が発表したように、世界中のあらゆる「知」に対する、その自由な態度に現れている。エックハルトは古代ギリシャやローマの哲学者にも、イスラムの哲学者にも、謙虚に学んでいたのである。その自由に満ちた説教は、それを熱心に聴くベギン達をして、ますます自由な生き方へと導いたことであろう。そのようなエックハルトの説教に励まされて、ベギン達は世の中で自由に「奉仕の生活」をする女性たちになっていったであろうことは、想像に難くない。

また、マイスター・エックハルトのドイツ語説教にうかがえる13世紀末から14世紀初頭にかけてのドイツにおける女性に対する教育観にも1810年代の日本の女性に対する教育観に、似ている点があった。それは、読み書きを中心とした学問に加えるに、手仕事について学ぶということである。

ただ、両者の教育観を比較するとき、わかることがある。それは、他でもない、イエス・キリストの福音が教えられているということである。エックハルトの説教をベギンたちは聴いていたのである。同じように、創設期の福岡女学院の生徒たちは、ギール女史から、またバイブルウーマンであった大島サキから、聖書を学び、また牧師の説教を聴いているのである。ここに現代の日本のミッションスクールが忘れていいるものがあるのではないか。ただアリバイ的に学校礼拝が守ら

れ、キリスト教学系の科目が必修でおかれているだけということに、現代のミッションスクールはなっていないだろうか。エックハルト当時のベギン達において、また創設期の福岡女学院の生徒たちにおいて、聖書の学びは刺身のつまのようなものではなかったに違いないのである。

## 結び

私としては、メソジスト監督教会婦人伝道外国伝道会もエックハルトも、ただただ純粹に女性の自立を支えるために寄与しようとしたのではないかという仮説の下に、今回の研究を進めてきたのであるが、それはあまりに希望的観測過ぎたようである。

現在、いずこのミッションスクールも学生集めに汲々としている。それは、採算を度外視できないからである。そして、その姿は少子化傾向がきわまってきた現在だから起こってきた問題ではないのである。ミッションスクールの経営的動機は、その創設期から自明だったのである。採算が取れるなら、教育活動を行おうという立ち位置だったのである。

また何よりも、当時、そのような動機で創設された女学校に、娘たちを入学させることでできた親には、それなりの経済力が要求されたことであろう。私の母親は大正9年(1920年)生まれであったが、赤貧の家庭に育ち、女学校など夢のまた夢であった。彼女は家庭の事情で小学校を4年生で中退している。彼女は後年、女学校卒業者のことを私に語る時、羨望の念に満ちて語っていた。そこには富める者に対する怨念さえ感じられた。昭和初年においても、私の母のような貧困家庭に育った者には、普通、ミッションスクールの門は開かれてはいなかった。まして、福岡女学院の創設期においておや、ではなかろうか。

その点、マイスター・エックハルトのベギン達に対する関わり方には、採算の度外視が看取される。エックハルトはドミニコ会の指導者的立場にありながら、ベギン達に深くかかわったのである。エックハルトはベギン達のために学校を建てたわけではない。彼は、例えばベギンの数が2000人を数えたというケルンにおいては大学の学頭であり、かつ修道院の院長であった。彼のオフィシャルな働きの対象は、正規の学生と

正規の修道女であった。しかし彼は、仕事帰りのベギン達が彼の説教を聴くことを許したのであった。多分そのために便宜も図ったことであろう。たとえばケルン大聖堂の近くの広場で説教したこともわかっている。それは、正に野外説教であり、ベギン達も堂々と聞くことができたのである。そして、その場で語られた説教の内容こそが、ベギン達に対する教育であった。その説教は、ベギン達の自立を端的に支え導くものだったのである。それは「彼女が聖霊を受けた時、はじめて彼女は奉仕の生活を開始し、海の彼方にまでも旅をし、説教をし、教え、使徒たちに仕える女、洗濯する女となったのである」というドイツ語説教86番にある言葉によく示されていた。そこには、家庭に良妻賢母としておさまるといような女性像は全くなかった。

他方、日本のミッションスクールの教育は良妻賢母を育てようとしたものと言うほかはない。ただ、そのようなミッションスクールの例に漏れない福岡女学院の創立に大きな役割を果たした大島サキその人に着目するとき、少し違った面が浮かび上がってきたように思われる。同じことがまた、記述のごとく、二瓶氏の論文が明らかにしている大島サキの生涯に示されていたように思われる。

エックハルトの説教に耳を傾けたベギン達の生き方から、大島サキの人生を視野に入れつつ福岡女学院の草創期の教育を見る時、現在の福岡女学院の進むべき道が示されるような気がする。すなわち、リベラルアーツの教育を重視しつつ、同時に学生が自立するための業を獲得せしめ、社会で何らかの実践的貢献を為す女性を育てることが、それである。いわゆる学者を産み出す学校ではないが、実はその草創期に目をやることによって気付きうるように、知と行を分けた上での知に重点を置くことをせず、大島サキを手本として、知と行の一致する地点を目指す教育を意図すべきであろう。ベギン達もまた、そのよきサンプルである。ベギン達はたとえばケルン大聖堂の近くの広場でエックハルトの説教を聴き、そこから何かを学び取ろうとしたのである。そのようなベギン達の熱心さもまた、現在のミッションスクールの学生たちが学ぶべき

ところではなかろうか。そして何よりもミッションスクールとしての福岡女学院を福岡女学院たらしめるものは、福岡女学院の創設が明治の信仰復興と深く関係しており、ベギン達がエックハルトの説教に深く養われていたことからわかるように、キリスト教信仰である。こうして、福岡女学院もその一つである日本のミッションスクールの女子教育が、常に社会的弱者達の側に立たれたイエス・キリストの福音に固く結びつけられていなければ成り立たないということが、今更のように確認されるのである。

## 註

- 1 『福岡女学院 105 年史』福岡女学院 105 年史編集委員会編、福岡女学院、1992.10、4 頁
- 2 『福岡女学校五十年史』福岡女学校五十年史編纂委員会編、福岡女学校、1936.3、4 頁
- 3 二瓶淨幸「大島サキと活水における最初のリバイバル」(『活水論集 58』活水女学院健康生活学部編、2015 年 3 月、所収)
- 4 同上
- 5 Josef Quint, Meister Eckhart, die deutschen und lateinischen Werke, die deutschen Werke, V, Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag, 1987.S.60-61. 訳文は次のものを参照した。マイスター・エックハルト著、植田兼義訳、『エックハルト I』(キリスト教神秘主義著作集 6)、教文館、1989、369 頁
- 6 『福岡女学院 80 年史 1885-1965』福岡女学院、1967.8、6 頁
- 7 『福岡女学校五十年史』福岡女学校五十年史編纂委員会編、福岡女学校、1936.3、4 頁
- 8 『福岡女学院百年史』
- 9 『福岡女学校五十年史』5 頁
- 10 上掲の二瓶淨幸「大島サキと活水における最初のリバイバル」より
- 11 同上
- 12 『福岡女学院百年史』39 頁-40 頁
- 13 二瓶淨幸「大島サキと活水における最初のリバイバル」(上掲)
- 14 Josef Quint, Meister Eckhart, die deutschen und lateinischen Werke, die deutschen Werke, III, 1975, W.Kohlhammer Verlag, S.492. 訳文は以下に所収の田島照久訳を参照した。エックハルト著; 田島照久編訳、『エックハルト説教集』、岩波書店、1990 年、223 頁-224 頁
- 15 マイスター・エックハルト著、植田兼義訳、『エックハルト I』(キリスト教神秘主義著作集 6)、教文館、1989、(上掲)
- 16 同上